

歌の事により、かの旅館にまゐりしついで、家司中川右近清基に逢て、かの都鳥はその日たゞちに鐵砲にて打ころし、露たがはず寫して進らせられしなりとかたりしかば、爲久卿はさらなり、同じく參向ありし賴胤卿をはじめ、つきそひきたりし京人までも、これをき、舌をふるつて、武備おごそかなるを畏れしありさまなりとぞ、のち爲久卿、巨勢大和守利啓について、謝恩の和歌をたてまつらる。

都鳥うごくばかりのうつし繪にこめけむ筆の心をぞしる

〔類聚名義抄九鳥〕鶴チトリ

〔饅頭屋本節用集知畜類〕千鳥ドリ

〔藻鹽草十鳥〕冬の物也、但秋にもよめり

さ夜千鳥 友千鳥 友もよびかはしなども、又ともなし千鳥 むら千鳥 河千鳥 浦千鳥 はま  
千鳥 ゆふ千鳥 夕なみ千鳥 ないくな いそ千鳥又さしでのいそ 千鳥の聲○註 あ  
かしの浦によめり 千鳥のあそぶさほ河 すたく千鳥集也 河千鳥すむ澤萬 島わたれ渡  
なぎさにきゐる夕千鳥 ともよばふ千鳥 千鳥足 島千鳥 さ夜千鳥とをよる興 やち  
よと鳴 千鳥ともくして むれゐる千鳥

〔東雅禽十七鳥〕鷗カモメ略○中 其類にして小なる潮に隨ひて、往來ふものを千鳥といふ、此物の名は火火出見尊の御歌にも見えて、万葉集には、乳鳥とも知鳥とも智鳥とも玄るせり、其義不詳。異名海物記に、鷗の別類、群鳴暗嗜隨潮、謂之信鷗と見え、泉州府志に、質小而輕迅、謂之信鳥と見えて、李東壁本草には、信鬼と云ひしもの、即此に信鷗と見え、是也、チトリといふ事、猶百千鳥などいふ事の如くなるべし。

〔本朝食鑑五水禽〕鵠訓ニ利

釋名、千鳥俗稱鶴、字書曰、音衡、荒鳥又飛鳥未詳、千鳥百千爲群、飛平于水、上故名、歌人用此名、萬葉集作乳鳥、又作智鳥、此皆據音製字平于